

平成20年度「教育研究支援プロジェクト経費」成果報告書

プロジェクトチームの代表者 コース等名 臨床心理士養成コース

氏 名 井上和臣

プロジェクトの名称	ひきこもり傾向の不登校児童生徒の「訪問臨床」に関する臨床心理学的研究	配分 予算額	882,000円
プロジェクトの概要	<p>文部科学省(2003)は、不登校対策の1つとして、訪問型支援の推進を提言した。徳島県の事業では、平成15年度から、徳島県立総合教育センターおよび徳島市教育研究所と、本学との連携・協力のもとで、本学の臨床心理士養成コースの大学院生が、ひきこもり傾向の不登校児童生徒の家庭を訪問し、心理的支援を行っている。訪問の進め方は、「ライフサポーター」(徳島県の事業)、「すだちアシスタント」(徳島市の事業)の実施要項に基づいている。訪問は、週1回、60～90分間である。訪問のケースを担当した大学院生は、ゼミまたはスーパーヴァイザーの大学教員から指導を受けている。また、本学の訪問臨床研修会で研修を行っている。</p> <p>家庭訪問による心理的支援について、本学では独自に「訪問臨床」と呼んでいる。訪問臨床とは、訪問者(臨床心理士を目指す大学院生)が、対象者(ひきこもり傾向の不登校児童生徒)の家庭を主な活動の場として、対象者およびその家族に対して、その状況・状態像・要求を的確に把握しながら、訪問の構造(時間、場所、訪問者と対象者の関係性、活動の安全性など)を柔軟かつ毅然とした態度で調整し、必要に応じて他機関との連携を図り、対象者を中心においた臨床心理的支援を行うことである。</p> <p>そこで本プロジェクトでは、次の3つの研究を行った。</p> <p>(1) 研究1: 訪問に対する保護者の期待を明らかにすることを目的とした。方法は、訪問を受けた児童生徒の保護者を対象に、「訪問への期待」について質問紙調査を実施した。</p> <p>(2) 研究2: 訪問の困難ケースの検討を行うことを目的とした。方法は、訪問への期待を示しながらも訪問者と対面することが困難だった3ケースの事例検討を行った。</p> <p>(3) 研究3: 臨床心理士養成における「訪問臨床」実践の教育的意義を検討することを目的とした。訪問ケースを担当した大学院生に、実践記録(毎月1回)および最終報告書を作成してもらった。これらの資料に基づいて、ひきこもり傾向の不登校への理解と対応、心理臨床家の力量形成などの視点から、大学院生にとっての「訪問臨床」実践の教育的意義を検討した。</p>		
成果の概要	<p>(1) 研究1: 13名の保護者から回答が得られた(回収率65%)。家族が期待するものは、「子どもの不安や悩みをやわらげてくれる」、「家族以外の人との人間関係が広がる」といった心理的支えと人間関係の経験であった。また、訪問への満足度においては、回答者のほとんどが満足と回答した。訪問者に求める資質としては、「親しみやすさ」などの性格特性に加えて、心理学の専門性が求められていた。自由記述では、「子どものことで相談にのってもらい、適切なアドバイスがもたらえた」、「わが家にとっては外部とのつながり」といったものがあり、児童生徒のみならず、家族にとっても心理的支援となっている様子が伺えた。</p> <p>(2) 研究2: 訪問を積極的に拒否することはなく、ドアや壁越しに訪問者と交流するという、希少事例の検討を行った。中学生男子2ケース、高校生男子1ケースの3ケースについて考察した。こうした訪問者への接近回避葛藤は、「再外傷体験への恐れと自己開示における葛藤」、「自己否定への囚われと自己肯定の希求における葛藤」などの心理機制が働いていると考察された。</p> <p>(3) 研究3: 平成20年度は、ライフサポーター37ケース、すだちアシスタント21ケース、計58ケースの派遣依頼を受理した。ライフサポーターの派遣回数は、小学生144回、中学生386回、高校生124回、計654回だった。すだちアシスタントの派遣回数は、小学生43回、中学生254回、計297回だった。訪問臨床研修会を5回開催し、事例検討を行った。訪問者は、ゼミまたはスーパーヴァイザーの大学教員から指導を受けた。また訪問者は、毎月1回、報告書を提出した。こうした実践の教育的意義について考察した。臨床心理士を目指す大学院生が習得すべき重要事項の1つに、面接構造(時間、場所、等)の理解がある。訪問臨床は、時間や場所を厳密に守ることが実際的に難しいことなど、相談室面接に比べて、ルーズな構造(柔構造)をもっている。しかしながら、こうした「型破り」を経験することが、反対に、「型」の重要性を認識することにつながり、面接構造への理解が深まるということが示唆された。</p> <p>(4) まとめ: 文部科学省(2008)は、スクールカウンセラーに加えて、平成20年度からスクールソーシャルワーカーの派遣事業を始めた。この趣旨では、問題を抱えた児童生徒への対応において、環境への働きかけと、関係機関のネットワークの活用が重視されている。こうした流れの中で、「訪問臨床」は、臨床心理学を基盤にしたスクールソーシャルワーク的活動として位置づけられる。本プロジェクトを通して、こうした特質をもつ「訪問臨床」の意義と課題が明確化された。</p>		

- (注) 1. 箇条書き等により簡明に記入すること。
 2. 概要については、800字程度にまとめること。
 3. 研究協力者として院生等が参加している場合、院生等の報告書があれば添付すること。
 4. なるべくパソコン等で作成願います。